

# 多文化共生に向けて ～愛知県各自治体の取り組み～ 2017年度版



名古屋学院大学  
国際文化学部国際協力学科

名古屋学院大学  
国際文化学部国際協力学科  
発展セミナー（佐伯担当）報告書

**多文化共生に向けて**  
**～愛知県各自治体の取り組み～**  
**2017 年度版**

2018 年 3 月

# 目次

## 名古屋市

### あいち国際プラザ

世界と名古屋を日本語でつなぐ 泉萌衣・内山航希・胡元哲・杉浦加奈・西森祐奈… 4

### 名古屋国際センター

NIC 日本語教室見学からみえた国際協力 梅田郁弥・黒田直樹・福手夏輝…………… 6

## 稲沢市 いなざわ日本語教室

身近にいる外国人にわたしたちができること 瀬古拓也・長谷川鉄浩…………… 8

## 岡崎市 市役所国際課

岡崎市役所国際課の魅力 岩月駿壱・楠山奈々美…………… 10

## 知立市 もやいこハウス

日本に暮らす外国人住民と言葉の壁 藏立あゆ美・新野太一…………… 13

## 東海市 国際交流協会

日本に住む外国人の実態 飯田莉奈・小島達矢…………… 15

## 豊田市 国際交流協会

世界が広がる日本語教室 磯村茉実・大藺紗憂・奥谷亜美…………… 17

## 東浦市 東浦にほんごひろば

東浦町と外国人 平林虎之介…………… 20

## 碧南市 友好親善協会

楽しく過ごすために 石川愛美梨…………… 22

## 結びにかえて

佐伯奈津子…………… 25

# 世界と名古屋を日本語でつなぐ

## あいち国際プラザ にほん語教室

わたしたちは、2017年11月18日と12月9日にあいち国際プラザのにほん語教室を訪問した。ここでは毎週土曜日の午前10時から正午まで日本語教室を開催していて、毎回10人前後の生徒が受講しているようだ。11月18日（1回目の訪問）の授業には内山と胡が参加した。行く前のイメージとしては、ふつうの学校のように先生1人に対してたくさんの生徒がいる授業ではないかと思っていた。しかし実際に行ってみると、ボランティアの先生1人に対し生徒1人か2人で授業をしていた。そして、その生徒のレベルに合わせてテキストを用意していて自然な日本語に直して、その生徒にあった授業をしていた。内山が参加したグループでは、外国の方が日ごろあったことをボランティアの先生に話し、先生はそのおかしな箇所を直して自然な日本語を教えていた。参加されている外国の方は日本語をだいたい話せているが、微妙なニュアンスや省略されている単語の意味を理解するのが難しそうだった。また、会話のクラスに参加させていただいたとき、ボランティアの方に簡単な日本語を要求され、どこまで簡単にすればいいのかわからずととてもとまどった。

12月9日（2回目の訪問）のにほん語教室には、内山と西森が参加した。この授業では、手品をつかって日本語を教えるという授業をしていた。手品といっても輪ゴムをつかった、わたしたちでも簡単にできるものだった。そのなかで生徒は、「指の名前」や「引っ張る」「ねじる」といった言葉を学んでいた。やはり生徒には言葉が少し難しく、ボランティアが一生懸命簡単な日本語で説明を繰り返していた。ボランティアだけでなく、急きょ参加したわたしたちにも積極的に日本語を聞いてきてくれたので、とても嬉しく教えがいもあった。手品をつかった授業を終えて、一人ひとりが感想を言う機会があったが、「こういう言葉は日常生活でつかえると思う」といった、先を見据えた発言ができていることにとても驚いた。

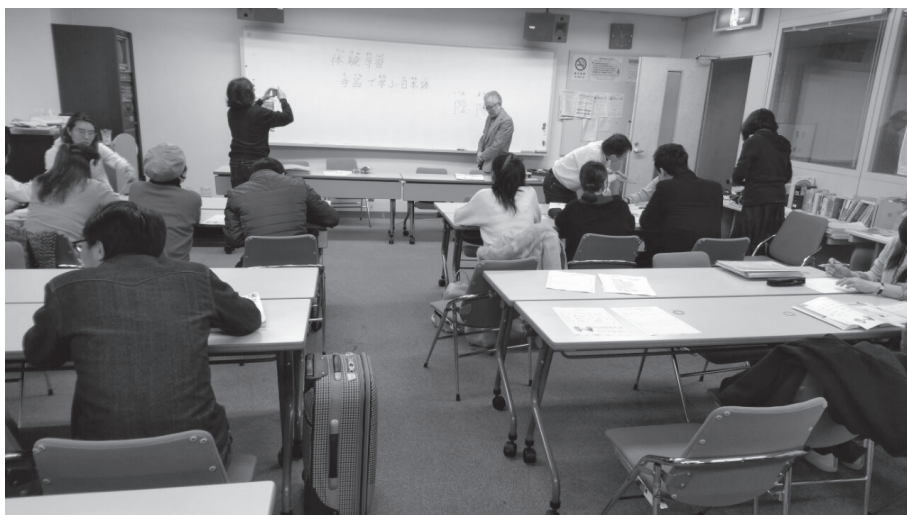
今回わたしたちが訪れた日本語教室には中国人、韓国人、台湾人、フィリピン人が多くみられた。しかし、名古屋市内にはもっと多くの国の人が生活をしていると思う。その人たちもおそらく日



本語に困っているはずだ。そのような人たちが気軽に通えるにほん語教室が、名古屋市内だけでなく愛知県内にもっと増えてくれたら嬉しいと思う。

実際に、にほん語教室の見学に行けなかった杉浦は、にほん語教室について調べ、名古屋市の自治体が

運営しているにほんご教室に通っていた知り合いに聞いた話などをまとめてみた。杉浦が調べていて驚いたのがホームページなどでの表記が「日本語教室」ではなく、「にほん語教室」だということだ。なぜ「日本」だけひらがなで表記されているのか気になった。



少しでも外国人の方が読みやすいように工夫されているのかもしれない。あいち国際プラザのホームページには、外国人向けに英語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語の5カ国語が準備されている。自分が外国人の立場になって考えてみたら、とてもみやすく、意味もすっかり理解できた。

杉浦の母のいとこの息子は、にほん語教室に通っていた。彼はいま日本語が流ちょうで、杉浦とも日本語で会話している。杉浦が幼いころ、彼が日本に留学に来ていたことは覚えていたが、なぜそんなに日本語が流ちょうなのか、ずっと疑問だった。彼にどうやって日本語を覚えたかなど尋ねてみた。大学に通いながら、空いている日はほとんど、大学で紹介してもらった日本語教室に行って、大学の日本語の課題をみてもらったり、実際につかう日常会話を教えてもらったり、教えてもらった言葉を日本人の学生や杉浦たちと実際に話したりして、復習していたのだという。いまは中国で日本語を教えている彼にとって、日本語教室が与えた影響は非常に大きかったようだ。そして彼の日本語の習得に自分自身がかかわっていたことに個人的に驚いた。杉浦の周りには母や叔父、叔母、いとこなど、日本に住み、母国語を話さず日本語を話す外国籍の人が多く。そのような人たちが少しでも住みやすくなり、言語などで少しでも困らないようにするためにも、にほん語教室は必要不可欠だと感じた。そして中国でこれから日本に来る中国人のために日本語を教えている親せきのように、日本に住んでいる外国籍の人を少しでも手助けできたらと思う。

(泉萌衣・内山航希・胡元哲・杉浦加奈・西森祐奈)

# NIC 日本語教室見学からみえた国際協力

## 名古屋国際センター NIC 子ども日本語教室

わたしたちは、外国人住民の子どもたちがどのようにして日本語を勉強しているのか、参加者や先生がたにどのような困難、苦勞などがあるのかを知るために、2017年11月26日に名古屋市中村区にある名古屋国際センター（NIC）が運営しているNIC子ども日本語教室を見学した。国際センター4階の事務室で日本語教室の概要や国際センターがおこなっている活動について説明を受けた。

名古屋国際センターでは日本語の学習支援だけでなく、外国人住民への情報提供や各種相談など幅広い支援をしている。曜日や時間帯によって提供言語が異なっている。曜日は火曜～金曜と土日で分けられ、時間帯は10時から12時、と13時から17時がある。無料行政相談では英語だけでなく、中国語やフィリピン語、ポルトガル語や、さらに最近では韓国語・ベトナム語・フィリピン語などにも対応した。

NIC子ども日本語教室では、日本語を母語としない6歳から15歳までの子どもたちを対象に、学校や日常生活で役立つ日本語の学習を支援している。その日の授業内容などの業務連絡は国際センターの職員がおこなっていたが、教室自体はボランティアが中心となって授業されていた。日本語教室は2016年度まで定員数は50名だったが、2017年から60人を目安に募集をかけたという。毎年定員以上の申し込みがあり、受けられない子どももいるのが現状だ。教室はそれぞれの期間ごとに区切られている。教室は毎週日曜日10時から11時半に開かれ、1タームは10回である。

日本語には、生活言語と学習言語の2パターンある。生活言語は「ありがとう」や「さようなら」など普段の生活でよくつかう言語であり、学習言語は授業や学習場面で使用される言語だ。生活言語は、1～2年である程度取得することができるが、学習言語は難しく5～7年必要だと言われており、学習言語のハードルの高さがわかった。

日本語教室は少人数制でおこなわれており、おもに3つのグループに分かれていた。小学校1年から3年生のクラス、4年生から6年生のクラス、中学生のクラスだ。小学生はグループ制で、カルタなどのゲームを交えながら勉強をする。中学生は1対1で、その子に合わせたレベルの教材で授業がおこなわれる。また勉強だけでなく、日本の文化にも触れるために、季節に合わせて七夕、節分などのイベントも開催される。子どもたちはおもに学校進学のために勉強を習いに来ている。参加者の子どもたちは中国人とフィリピン人が多いが、インドネシアやベトナム、ネパールなどの子どもも多くなっている。最近では、あいさつ程度の日本語しかつかえない子供も増えてきているという。この問題は、日本に働きに来る外国人労働者が増加しているいっぽうで、職場では最低限の日本語しかつかえないため、家庭内での会話が母国語になり、結果として子どもが日本語をつかう場面が少ないことが原因だと思われる。

わたしたちは、中学生クラスの子どものための授業を教えるため、ボランティアの方とマンツーマン

マンで日本語教室に参加させていただいた。中学生のクラスでは、生徒たちがまじめに授業に取り組んでおり、勉強への意識の高さがうかがえた。授業では、漢字の読み書きや、文章の理解・音読をおこなった。この日は2017年最後の日本語教室だったこともあり、年賀状作成もおこなった。

授業を終え、中学生のクラスの理解能力の高さに驚かされると同時に、日本語をどのように伝えればうまく理解してくれるかを考えさせられた。わたしたちが普段からつかっているしゃべり言葉では伝わらないこと、日本語の根本的な難しさ、今回では「～なこと」のこの意味・説明や、年賀状作成での書きかたの決まりの説明などが非常に難しく、うまく伝えることができなかった。

ボランティアの困難、苦勞については、子ども一人ひとりに決まったカリキュラムがなく取捨選択をしなくてはいけないこと、子どもの将来に関係させていくことが挙げられた。授業後にはボランティアと国際センターの職員とで、その日の反省や問題点が話し合われていた。みな自分の意見を伝え、よりよく日本語を理解してもらうためにとても熱い議論が交わされていた。

わたしたちは今回の日本語教室訪問でさまざまなことを学んだ。子どもたちと触れ合えた時間は貴重で、なにより子どもたちが言葉を理解してくれたときの喜びや笑顔をみたとき、また帰るときに「先生、ありがとう。さようなら」と言ってくれたときはとても嬉しかった。日本語教室に来ている子どもたちは、本当に日本語について学びたいと考え、自主的に交通機関などをつかい、日本語教室に足を運んでおり、日本語を学びたい意欲が伝わってきた。子どもたちだけでなく、国際センターの職員、ボランティアスタッフが一体となっていてできる教室なのだと思います。

今回の体験で、名古屋市には日本語の授業が受けたくても受けられない子どもたちがいたり、授業がおこなえる環境が少なかったりする問題があることもわかり、愛知県が力を入れていくべきことのひとつだと感じた。

今回の貴重な体験で得たこと、教わったことを今後の自分の成長に活かしていきたい。

(梅田郁弥・黒田直樹・福手夏輝)

名古屋市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 2,307,307 人

外国人登録者数 74,180 人 (割合 3.22%)

1 中国	22,056 人
2 韓国・朝鮮	16,165 人
3 フィリピン	8,568 人
4 ベトナム	5,530 人
5 ブラジル	4,047 人
6 その他	17,392 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 身近にいる外国人にわたしたちができること

## いなざわ日本語教室

わたしたちは2017年12月2日、いなざわ日本語教室でボランティアとして活動に参加した。いなざわ日本語教室は2015年4月1日に設立された。おもな活動内容は、外国にルーツのある子どもの日本語学習をサポートすることである。現在の生徒数は25名で、ブラジル人、中国人、フィリピン人、ペルー人、ベトナム人がある。毎週土曜日（第三土曜日を除く）午前10時から11時30分に稲沢市勤労福祉会館で、午前の部がおこなわれている。午後の部は、午後1時30分から3時に稲沢市総合文化センターでおこなわれている。

わたしたちは午前の部の活動に参加した。わたしたちが行ったときには、中国人の小学生2人とブラジル人の小学生2人とベトナム人の中学生1人がいた。いなざわ日本語教室はボランティアで活動しているグループであるため、日本語教室の代表者の近藤淳宗さんに加えて、20歳代と40歳代の方のボランティアがいた。行く前は日本語の文法の勉強をしていると想像していたのだが、実際にはほとんどの人が個別指導で教えてもらいながら学校の宿題をやっていた。わたしたちは中国人の小学3年生の子の宿題をやるのを手伝った。わたしたちが教える必要がないくらいスムーズに宿題を進めていた。外国人といってもいろいろなケースがあり、小学1年生ぐらいの年ごろに日本に来た外国人は日本語に順応しやすく、日常会話も身につける苦勞が少ないということを感じた。わたしたちの周りにもこのようなケースの外国人がいて、その人は日本語も母国語も同じように流暢に話す。今回、日本語教室に参加していた小学生の4人はこのケースにあてはまっていた。

ベトナム人の中学生は日本語の文法を勉強していた。この方は中学1年の時期に日本に引っ越してきたので、軽い日常会話はできても、黒板や教科書の文字が読めず授業についていけないという悩みを抱えていた。わたしたちの経験からいっても、中学時代にこのようなケースの人がいた。その人は、中学1年のときに、フィリピンから稲沢の中学校に転校してきた。彼女は、日本語は日常会話程度なら順調に覚えることができ、クラスに馴染めないということではなかったのだが、文字の読み書きにはとても苦勞していた。やはり、話すことに比べると、読み書きは難しいのだと感じた。重要な時期にある中学生のときに日本に来た外国人がいちばんたいへんと思う。その時期に日本語の能力をどれだけ習得できるかによって、その人の未来が大きく変わってくるからである。そのような人たちにとって、市が無償でおこなっている日本語教室は重要な役割を果たしていると感じた。

しかし、いなざわ日本語教室はあくまでボランティアで活動するグループであるため、学生、社会人、シニアの方ができる範囲で子どもたちの勉強をみている。そのため、積極的にボランティアをする人がいなければならないという問題がある。わたしたちが日本語教室を見学した際も、外国人の生徒数に比べてボランティアの人の数が少ないと感じた。また、若い人が少ないとも感じた。10歳代、20歳代の人たちがもっと、外国人に日本語を教えることに興味をもてば、この



状況を変えられるのだと思った。わたしたちも積極的に日本語教室の活動に携わっていきたくて考えるようになった。

いなざわ日本語教室を訪れて、一番印象に残ったことは、とても楽しい雰囲気勉強していたことである。外国人の生徒は、日本語教室の先生やボランティアの人と雑談をしながら楽しく勉強していた。この様子から、外国人の生徒が安心して日本語を勉強できる環境が必要で、ただ単純に日本語を教えるだけでは不十分であると感じた。いなざわ日本語教室の素晴らしいところは、子どもたちが楽しめるような環境をつくっているということだと思う。たとえば、12月の毎年恒例のクリスマス会では、生徒のみんなで作ってクリスマスケーキをつくっている。10月には日本の伝統文化であるお月見にちなんで、生徒のみんなでお月見団子をつくっている。そして、中国、フィリピン、ドイツ、などさまざまな国籍の人たちが自分の国の料理を生徒のみんなに教えるというイベントが定期的におこなわれている。それ以外にも、子どもたちが楽しんで参加できるようなイベントがたくさんあるそうだ。日本語教室に継続して行くことができない外国人が多いことが問題となっているが、このように、日本語の勉強だけではなく、楽しく参加できるようなイベントを増やせばよいのではないかと思う。

今回、いなざわ日本語教室を訪れ、実際にボランティアとして活動に参加したことで、外国にルーツのある方がたと交流することができたので、非常に貴重な経験となった。教室にいた子どもたちは、とても元気がよく、一生懸命に勉強に取り組んでいた。自分が住んでいる地域で、多くの外国人が日本語の習得のために努力していたことをはじめて知った。国際協力というと、どこか難易度が高く、自分には関わりのないことというような考えを多少もっていたが、地元の日本語教室にボランティアとして参加することが、身近にできる国際協力なのだと思う。まずは、若い人たちが、日本に住んでいる外国人のことをもっと知っていかなければならない。今後もいなざわ日本語教室の活動に興味を向けながら、国際協力に携わっていきたくて思う。

(瀬古拓也・長谷川鉄浩)

稲沢市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 136,597 人

外国人登録者数 2,846 人 (割合 2.08%)

1	ブラジル	982 人
2	フィリピン	516 人
3	中国	488 人
4	ベトナム	275 人
5	韓国・朝鮮	223 人
6	その他	362 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 岡崎市役所国際課の魅力

わたしたちは、2017年11月5日の日曜日に岡崎市のリブラ国際交流センターでおこなわれている日本語教室を見学した。この日本語教室は、市役所の国際課と連携しておこなわれており、岡崎市の国際交流についてたくさん知ることができた。

岡崎市市役所国際課は、外国人市民のために多くの活動をしている。

1つ目は、国際化・多文化共生の推進だ。岡崎市多文化共生推進基本指針の計画・実施、国際化推進基礎調査の実施、岡崎市国際化推進委員会の開催、市民や大学教授などのスペシャリストを招いた多文化共生推進基本指針づくりをしている。

2つ目は、外国人相談窓口の案内だ。ここでは外国語ポルトガル語、英語、中国語を話せるスタッフが外国人の対応をしており、相談が1万3000件を超えるときもあるそうだ。また、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語、英語、中国語、韓国語に対応した日本の法制度や相談窓口情報などの多言語情報サービスの実施をしている。

3つ目は、多文化共生事業だ。木曜日、土曜日、日曜日にボランティア団体と岡崎市国際交流協会が主催する日本語教室を開催したり、回覧板などの町内会の文書をポルトガル語、英語、中国語、スペイン語、タガログ語で翻訳し、外国人市民へわかりやすい文書を作成したりしている。ここでは、普段つかわれている日本語を、曖昧な表現ではなく、外国人にもわかるように配慮し、できるだけ伝えたい情報を簡単にした「やさしい日本語」をつかうことを心がけているそうだ。さらに、外国人市民が多く住んでいる地域で、外国人市民が地域の行事に参加するときや、町総代・自治会長等が外国人市民とコミュニケーションをとるときに通訳の役割を担う地域の外国人市民（コミュニティ通訳員）を紹介している。外国人市民が価値観の違いを尊重しながら理解できるようにするため、県営住宅の集会所などにおいて、ゴミの分別方法や就学手続きなどをテーマと

した生活ルール講座や、多文化共生フェスティバル、祭りなどイベントなどを開催している。

4つ目は、多言語による生活情報の提供だ。ポルトガル語、英語、中国語、スペイン語で市民生活便利帳を翻訳するほか、ゴミの分別、防災対策、国民健康保険制度、119番通報・応急手当、外国人住民の新しい制度の説明をした多言語生活情報動画の配信、第1・



第3木曜日の7時45分から7時55分にFMおかざき76.3で多言語による生活情報の放送や、ポルトガル語、英語、中国語で岡崎市のホームページを自動翻訳している。

5つ目は、外国人市民の防災対策だ。岡崎市の外国人市民の防災対策紹介資料の提示や、気象情報や地震などの情報（多言語防災緊急メール）をポルトガル語、

英語、やさしい日本語で配信、やさしい日本語で地震や台風など災害の説明（多言語防災チェックガイド）、家庭の防災対策などをポルトガル語、英語、中国語で紹介した冊子を発行している。ここでわたしたちが驚いたのは、緊急時に日本語が通じない場合に備え、小さく折りたたまれた紙に英語、タガログ語、ポルトガル語、スペイン語、中国語で急病や交通時事故、トラブルなどに巻き込まれている外国人を助けるためにつくられた緊急時指差し会話集が置いてあったことだ。緊急時にすぐに出すことができ、持ち歩くのにもかさばらないので、多くの人が持ち歩くべきだと思った。ほかにも、岡崎市は災害時通訳ボランティアをおこなっている。

6つ目は、姉妹友好都市の紹介だ。岡崎市の姉妹都市は、アメリカのニューポートビーチ市とカリフォルニア市、スウェーデンのウッデバラ市、友好都市は中国のフフホト市である。この4都市と教育、文化、スポーツ、産業などをおして多彩な交流をし、市民の相互理解と友情を培っている。

7つ目は、国際交流の拠点施設の提供だ。岡崎市のリブラ国際交流センターでは、世界の国々の文化や習慣を学び、理解を深めることを目的としたワールドレクチャー、世界の国ぐにの家庭料理を通じて、さまざまな文化を身近に感じることを目的とした料理講座（ワールドクッキング）、各国の言葉を学ぶことによって、世界のさまざま国への理解を深めることを目的とした入門者向けの語学講座（ことばの教室）を開催している。

8つ目は、ボランティアの支援だ。外国人市民支援事業費のための補助金を提供したり、JICAボランティアなどを支援したりしている。岡崎市には多くの団体が存在する。たとえば、外国籍の方がたと日本人とのふれあいの場をつくるために、夏祭りなどの交流イベントを開催する「国際交流事業部会」だ。ほかにも、外国人市民に無料で日本語を教える「共生支援部会」、国際理解を深めるために、外国人を講師に招いて英語で母国の文化を紹介してもらった講座や、小中学校を訪問して外国文化を学ぶ出前講座を開催する「人材育成部会」、六ツ美市民センターで中国やベトナム出身者を中心とした外国人市民に無料で日本語を教える「外国人のための日本語講座の会」がある。



今回、はじめてこのような場所に行き、わたしたちが知らないところで外国人のために多くの活動がされていることを知った。外国人市民に役立つよう、さまざまな工夫をこらしている岡崎市役所国際課の魅力を感じることができた。このように市でおこなわれている活動に、今後も参加してみたい。

(岩月駿壺・楠山奈々美)

岡崎市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 383,779 人

外国人登録者数 10,135 人 (割合 2.64%)

1	ブラジル	3,438 人
2	フィリピン	1,696 人
3	中国	1,632 人
4	韓国・朝鮮	1,300 人
5	ベトナム	745 人
6	その他	1,324 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（平成 28 年 12 月末現在）」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 日本に暮らす外国人住民と言葉の壁

## もやいこハウス

わたしたちは2017年11月25日、知立市多文化共生センター「もやいこハウス」を訪問した。そして、この施設で外国人相談窓口を担当している土田さんにインタビューをさせていただいた。「もやいこハウス」の活動、実際に知立市に住む外国籍の方が、困っていること、また、かれらが知立市に求めていることなどを聞くことができた。

現在、知立市の外国人住民の割合は6.69%である。この割合は、総人口の比率で見ると、愛知県内でもっとも高い割合となっている。知立市には、とくにブラジル人住民が多い。この外国人住民の増加を受けて、知立市では「知立市多文化共生推進プラン」が進んでいる。この計画は、多文化共生社会の実現に向け、すべての市民の人権が尊重され、日本人も外国人も、同じ地域に暮らす市民として、ともに安心して生活できる知立市を目指すという目標を掲げている。

今回わたしたちが訪問した「もやいこハウス」も、この計画の一環だ。国籍や民族の違いを超えてお互いを理解し合う多文化共生の拠点として、知立団地の商店街内に、空き店舗を利用して2012年8月2日に開設された。「もやいこハウス」の「もやいこ」とは、三河地方の方言で「一緒にひとつのことをする」という意味だ。地域密着型施設として、地域の方がたと協働で運営されている。

この施設では、外国人相談および情報提供、放課後学習支援教室などがおこなわれている。外国人相談は、おもに、市役所の書類の翻訳（保育園・学校の転入手続き・年金など）である。担当の土田さんは、自身もブラジルで生まれた日系ブラジル人で、高校生のときに日本へ来た。その際、かなり言葉の壁に悩んだそうだ。その経験から、自分と同じ境遇で悩む地域の外国人の方がたを助けたいと思い、「もやいこハウス」でのボランティア活動をはじめたそうだ。土田さんは、「もやいこハウス」で、日本語書類のポルトガル語翻訳をおこなっている。わたしたちが施設を訪問した際にも、外国人のご夫婦が市役所から送られて来た書類をもって相談に訪れていた。わたしたちはその光景をみて、市の側からも、外国籍の方がたにもっと彼らが必要とする支援をするべきだと感じた。

また、「もやいこハウス」のもう一つの主要な活動として、「未来ジュニア」という活動もある。この活動では、外国にルーツをもつ子どもたちのために算数や英語などの授業、小さな子どもを育てる外国人の親のための相談会などがおこなわれている。外国人居住者が悩むことのひとつとして、子どもの教育の問題は大きい。自国の言葉で子どもを育てるのか、それとも日本語で育てていくのか、悩む親が多いようだ。

今回の、インタビューを通して、やはり定住外国人の方が生活していく上で「言葉の壁」が大きな障がいとなっていると感じた。日本で生活をしていても、日本語を満足に話せる人は少ないらしく、日本で生活する上で通訳の存在は欠かせない。しかし、知立市内に通訳がいる保育園・小学校は各1カ所だけで、その1カ所に外国人の生徒が集中してしまっている。なかでも、保

育園は入園が困難で、子どもを預けることができないために、働くことが難しいお母さんもいる。そんなお母さんたちのために、「もやいこハウス」の隣には託児所が設けられている。そちらに、子どもを預けて仕事に行くお母さんたちも多い。しかし、その託児所に1カ月まるまる預けた場合、月謝が4～5万円ほどかかり金銭的に厳しいという問題もありそうだ。

こうした、通訳不足や支援の少なさが、結果的に外国人居住者の生活を圧迫してしまっている。また、そのような言葉の壁をなくすために市役所では、日本語教室が開かれている。3カ月ごとのターム制で、1回100円という低料金で、しっかりとしたレッスン形式で受けることができる。しかし、実は土曜日の夜19時からの時間帯しかなく、小さな子どもをもつ家庭では、通うことが難しいらしい。行政からの支援が、本当に助けを必要としている人びとに行き届かないという、市民と市からの支援のすれ違いの現状が垣間みえた。このお話を聞いて、子どもに対する日本語教育の支援を増やしていくべきだと思った。言葉の壁を越えた教育は決して簡単なことではないが、多様化が求められるいまの日本にこの問題は避けてはとおれない課題だと感じた。

最後に、「もやいこハウス」の仕事のなかでも、公的書類の翻訳が主だと聞いて、外国人用の翻訳された書類の必要性を実感した。また、学校や保育園だけでなく、病院などの医療機関も通訳がいるところは少ないらしく、深刻な通訳不足を感じた。今回のインタビューをとおして、いままで知らなかった、自分たちの暮らす知立市の外国人住民の暮らしぶり、そのなかに存在する言葉の壁の問題を改めて知った。これは、グローバル化が進む現代の日本の各地でみられる問題だろう。日本を選んで、暮らすことを決めてくれたかれらのために、わたしたちが積極的に声を上げていかなければならないと思った。

(藏立あゆ美・新野太一)

知立市 外国人登録者数 平成28(2016)年末現在

市内総人口 70,826人

外国人登録者数 4,740人(割合6.69%、県内1位)

1	ブラジル	2,469人
2	フィリピン	643人
3	中国	498人
4	ベトナム	278人
5	韓国・朝鮮	126人
6	その他	726人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況(平成28年12月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 日本に住む外国人の実態

## 東海市国際交流協会

ゼミの一環で、2017年12月3日に東海市日本語教室を見学させてもらった。授業を受ける前は、わたしたちが住んでいる市に日本語教室があることすら知らなかった。実際に日本語教室に行ってみると、わたしたちが思っているより生徒がいて驚いた。そして、生徒の出身国は中国が多いと思っていた。なぜなら観光地などで中国人を多くみかけるからである。しかし、日本語教室に参加させてもらい、ベトナム人が多いことに気づくことができた。ベトナム人が8割から9割ほどを占めており、男女比としては男性が多く、そして年齢層もわたしたちよりも上の方ばかりだった。そのなかに工場で作業者として働く人など社会人が10人ほどいた。母国から離れて、慣れない土地で言葉の壁もあるのに働いている生徒をみて、わたしたちにとっても刺激になった。

授業の内容も見学させてもらったが、能力別の授業形態で、生徒の実力にあった授業をおこなうシステムになっていた。そして、どのクラスでも生徒は生き活きと授業に取り組んでいた。見学させてもらったことで感じたことがある。それは、教えている講師は身振り手振りで教える、教わる生徒も真剣な表情でしっかりと話をきくなど、生徒・講師のお互いが全力だということだ。見学しているだけでも、活気のある授業をしていることが伝わってきた。日本語教室に通っている生徒は、日本で生活するために日本語を学びに来ている。お金を稼ぐため働くときに必要だから学びに来ている社会人もいる。生活がかかっている。少し大げさかもしれないが、日本で生きていくためなのである。だからこそ、それに応えようとして講師も全力になるのだろうと感じた。

わたしたちはおもに初級のクラスを見学させてもらったが、どの生徒もわかったと思ったら間違いを恐れずに答えていた。そして間違えた答えを言った生徒を笑う人は誰もいなかった。日本人は間違えることや、笑われることを恐れて答えない場合が多くある。しかし、今回の授業を見学させてもらって、間違いを恐れずに自分の意見を言うことの大切さを感じることができた。本当に大切なことは間違えないことではなく、間違えてもいいからしっかりと学ぶことだと、恐れずに答えていく生徒をみてはっとさせられた。そして、わたしたちはこれを見習う必要があると思う。このように、わたしたちは外国人労働者から学ぶことも、たくさんあるということに改めて気づくことができた。

わたしたちが授業のはじまるのを待っているとき、ある生徒同士の会話が聞こえてきた。日本語がどれだけ話せても読み書きができなければ事務仕事に就くことができず、肉体労働しか選択肢がないというような内容であった。それはまさに日本語教室に行かなかつたら知ることができなかった、外国人労働者の現状だと思う。子どもに比べて記憶力も落ちているであろう年齢だということもあり、大人になってから仕事をしながら違う国の言葉を習得するのは、とてもたいへんなことだということにも気づかされた。それを週1回助けている日本語教室はとても素晴らしいプログラムだと思う。

日本各県の市町村がもっと日本語教室の活動に力を入れていけば、日本で働いている外国人も日本の文化や日本語を学べて、いまよりもとても住みやすくなると思った。たとえば役場への書類の提出などの複雑な日本語が必要なとき、職場での上司への話しかた。日本で暮らしていくことも日本語教室の存在意義かもしれないが、わたしたちは日常の生活にプラスして、よりよい暮らしができるようにしていくことが大切なのではないかと思う。それが住みやすくなるということだとはないだろうか。日本は島国でほかの国と接していないことや、日本語が英語とはあまり似ていない言語だということもあり、外国語を話せる人がほかの国と比べてかなり少ないと思う。そのことから外国の人と積極的に話す日本人はあまり多くないだろう。日本語教室に行き、同じ状況の人と出会うことで、友好関係も広がると思った。

これからの将来、日本は少子高齢化が深刻化するとされている。解決策の一つとして外国人労働者に目を向けるのもよい案だと、今回の日本語教室に参加させてもらって実感した。外国人労働者が増えることで、税金を納めてもらえることができれば、介護という職業に外国人労働者に就いてもらえることができれば、社会人として働く日本人が減ってしまい、高齢者を金銭面・介護面を支えることができなくなっている状況も外国人労働者に助けてもらうことも可能なのではないかと思った。そうすることで、人手不足から介護鬱になる人も少しは減るのではないか。

外国人労働者を助けるために、わたしたちができることは少ないがゼロではない。わたしたち一人ひとりが少しでも何か助けられることをみつけていけば、日本は外国人労働者に対してとてもよい国に変わると思う。反対に外国人労働者に日本のこれからの未来を救ってもらうこともできるかもしれない。これからのゼミで各自が体験してきたことをもとに外国人労働者はなにに困っていて何を求めているのか。外国人労働者の存在が日本という国の問題解決の糸口にはならないか。話し合っていて考えていきたいと思う。 (飯田莉奈・小島達矢)

東海市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 112,808 人

外国人登録者数 1,592 人 (割合 1.41%)

1 韓国・朝鮮	415 人
2 中国	322 人
3 フィリピン	263 人
4 ベトナム	220 人
5 ブラジル	116 人
6 その他	256 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>



# 世界が広がる日本語教室

## 豊田市国際交流協会

2017年11月19日、わたしたちは豊田市国際交流協会の運営する日本語教室にお邪魔させていただいた。

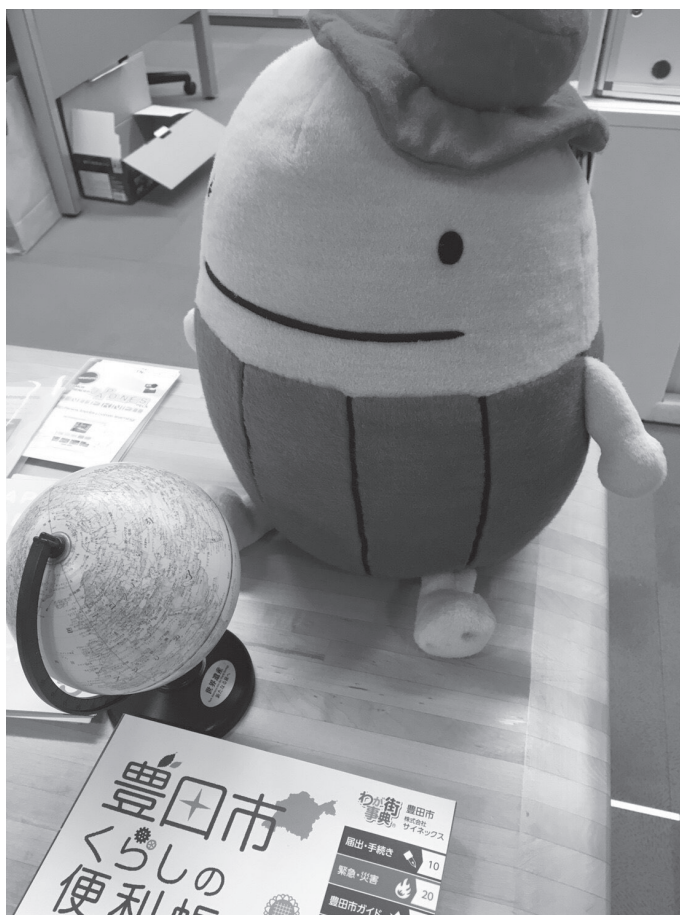
日本語教室のコースが細かく設けられている。一つ目の「TIA のにほんごひろば」では、基礎クラス、読み書きクラス、総合クラスの3クラスに分けられ、生徒が勉強している。基礎クラスは入門から初級、読み書きクラスと総合クラスは初中級のレベルである。テストによってクラス分けをするため自分が一番苦手としている分野を外国籍の方が把握できると感じた。二つ目の「日本語サロン」では、社会人や主婦の方がたが多く利用しビジネス用語を学ぶことができ、レベルは入門から初級までである。三つ目の「Alpa 日本語教室」は、ボランティアグループのレベル別クラス形式の日本語教室である。テキストは用いず、ボランティアの方による会話を中心としたやさしい日本語を学ぶ。テキストを用いない理由は日本語教室に来られない日もつづけて勉強できるようにするためである。豊田市日本語教室では教科書といったテキストに頼らない教えかたが徹底されているが、「日本語サロン」だけは、唯一テキストを使用している。

日本語教室のボランティアは、TOEFL や日本語検定などの資格をもっていなくてもできる。外国籍の方たちにおもに日本語をつかって会話をし、ジェスチャーを交えながら相手に合わせてやさしい日本語で接することが役目だという。

豊田市国際交流協会の日本語教室は多様な国籍の人を対象としている。そのなかでもインドネシアやブラジルの方が多い。年代別にみると20代から40代と幅広いが、とくに20代の方が多い。豊田以外にも三好や刈谷のほうから来る人もいる。

この日本語教室が大切にしているのは、学習支援のために、生徒たちの気持ちに寄り添うことである。教室によってサポートの仕方は違うが、日本語のサポートをするという目的は同じなのだ。生徒の気持ちを重視している方針はとても素敵だと思った。

見学させていただいたとき、ボランティア1人に対して4～5人の外国籍の方がグループになって勉強していた。少人数だとしっかり一人ひとりをみてもらえるので安



心だ。文章を書く練習をしたり、お店の写真をつかって学習したりしていたので難しそうだと感じたが、ボランティアの方がたは笑顔でゆっくり日本語を話すという工夫をされていて、生徒に対する丁寧さとやさしさを感じた。

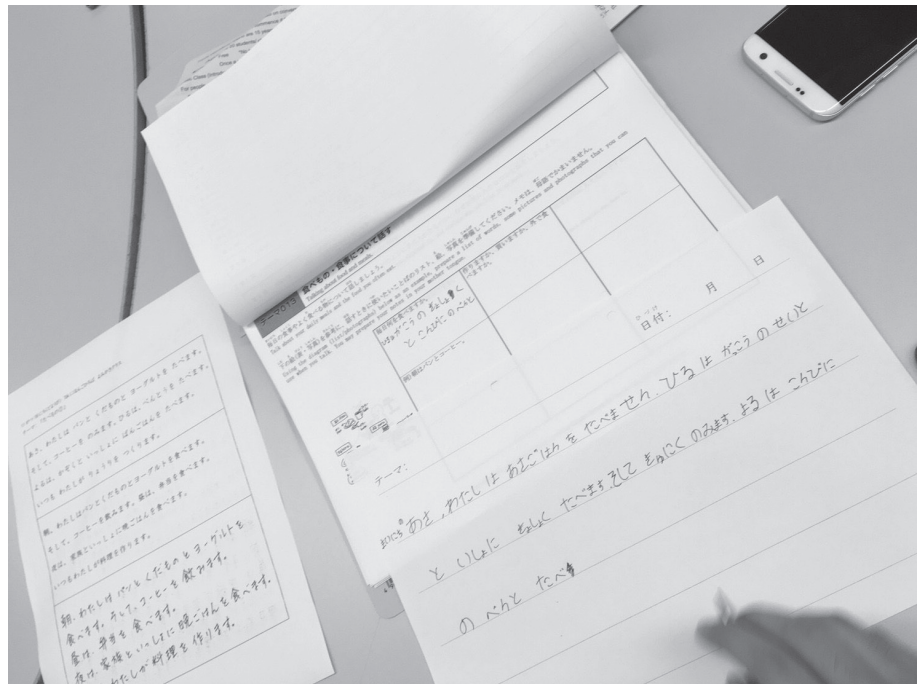
ボランティア活動をする上で欠かせないことは外国人との上手なコミュニケーションだ。前述したように、日本人であるボランティア

1人と外国籍の方たち複数人がグループになって日本語を学んでいるのだ。はじめはお互い緊張しているだろうからまずは仲よくなることが大事である。そのために相手を下の名前で呼び、自分だったらどうされたら嬉しいかを考える必要がある。教えながら仲よくなることで日本語教室にも継続して通ってくれることに繋がるのだ。

また日本語を教えるとき、日本語を日本語で教えることを心がけているため、外国人にうまく伝わらないこともあるそうだ。そういう場合は単語だけ訳を教えてあげ、どうすれば相手に伝わるのかボランティア同士で相談しあうこともある。コミュニケーション能力も教えるのに大切なことだと改めて感じた。

この日本語教室ではただ単に日本語を教えているだけではない。「生活に役立つ日本語を教えること」を重要視している。

日本語を教えても、実際に日常生活で役に立たなければ意味がないのだ。たとえば、買い物をするときのレジの会計や病院へ行くときのやり取りができない。市役所で手続きをするときに手順がわからない。さらに地震や津波などなにか災害が起きたとき、避難命令の日本語がわからなければ避難し遅れてしまう。わたしたちが普段あたりまえにつ



かっている日本語は、外国人がつかうとなるととてもたいへんなのだ。こういった場面で困らないように、この日本語教室では実際の病院でのやりとりを撮影したものをみせて聞き取れたか確認することや、防災訓練をおこなっている。

日本語教室で外国人と会話をしながら交流し、日本語をサポートすることにはさまざまな工夫があることを、この豊田市国際交流協会の日本語教室で知った。主婦の方や働いている人、子どもや日本語がまったく分からない人でも参加できるように、たくさんの人を対象にコースが分かれているのがこの日本語教室の魅力だと思う。外国人と会話をしながら交流することで、お互いの国の文化や価値観を理解し合うこともできる。日本語の学習を重視するだけでなく外国籍の方と笑顔でコミュニケーションをとることで、より日本語の習得が進むはずだ。豊田市国際交流協会の日本語教室は、このような活動をしているから雰囲気も暖かかったのだと感じた。このボランティア活動が外国人の背中を押してくれたらいい。そうして人間関係が広がり、仕事やほかの活動にも参加できる勇気もってもらえれば最高ではないか。(磯村茉実・大菌紗憂・奥谷亜美)

豊田市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 423,885 人

外国人登録者数 15,672 人 (割合 3.70%)

1	ブラジル	5,984 人
2	中国	2,746 人
3	フィリピン	1,678 人
4	韓国・朝鮮	1,192 人
5	ベトナム	891 人
6	その他	3,181 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 東浦町と外国人

## 東浦にほんごひろば

わたしは2017年11月25日、東浦町でおこなわれているにほんごひろば（日本語教室）に行ってきた。にほんごひろばは、月に2回開かれており、無料である。ブラジル、フィリピン、中国を中心にアジア、南米などから多くの国籍の人が参加している。年齢層は幅広く、小学生の子どもから40代ぐらいの人までどの年齢の人でも対応していた。東浦町に住んでいる人だけが対象ではないので、豊明市に住んでいる人も参加していた。基本的に1人の外国人に対し、ボランティアが1人つくかたちで日本語を教えていた。

にほんごひろばは、ボランティアによって運営されており、東浦町から日本語教室の開催を依頼されてはじまった。ボランティアのなかには40代ぐらいの人も数人いたが、多くは定年を迎えたか迎える手前の人だった。ボランティアにはスペイン語、中国語を話せる人が1人ずついるが、そのほかの言語に対応ができていないという。

学習内容は、にほんごひろばに来た人の要望でその日に決める。小学生の子どもが宿題をしたり漢字を勉強する、日本語検定の試験に向けてわからないところを学習する、日常会話をできるようにするためにとにかく日本語で会話するなど多様だ。小学生用の漢字ドリルや、日本語検定に向けた敬語や助詞についての本などを多数揃えており、勉強できる環境は整っていた。

ただ、にほんごひろばが開かれる施設は県の施設なので、月に限られた回数しか利用できない。町営の施設もいくつかあるが、多くは土日に決まったグループが活動しており、借りることができない。県から借りている施設も駅から遠いため、少し離れたところに住んでいる人は毎回参加することができず、日本語の上達に時間がかかってしまう。今後は施設探しを含めて、日本に住む外国人がもっと日本語と触れ合えるような機会を増やしたいとのことだった。

また、にほんごひろばは土曜に開催されており、仕事があるために参加できない人もいる。近くに住んでいるブラジル人もいるが、あまり継続してにほんごひろばに通ってくれないので、日常生活で会話は上達しても読み書きの上達がなかなか進まないという。ブラジル人とは逆に、中国人やフィリピン人は毎回のように参加してくれ、その都度やりたいことや、わからないところをまとめてきてくれるので、日本語の上達はスムーズに行く。中国の方は日本語検定の勉強などをおこなっていて日本での生活をよりよいものにしようとしていた。

にほんごひろば終了後には、参加してくれた外国人についてのミーティングがおこなわれる。ミーティングは30分弱で、生徒の日本語レベルが現状どうなっているか、今日何を学んだかなど、一人ひとりについてボランティア全員で今後の対策を立てていた。わたしが行ったときは、ブラジルの方が通訳とポルトガル語で話してしまい、結果としてほとんど日本語を話さないで帰ってしまうことが議題となっていた。ブラジルの方は日本に来て20年以上たっており、日本語を話すことに関しては問題ないので、日本人のボランティアと勉強させるべきなのか、前回来たのはいつなのかなど、丁寧に話し合われていた。にほんごひろばの宣伝のために近くの団地へ広告を

貼りに行くこと、東浦で行われる国際関係のイベントのお知らせなども同時におこなわれていた。ここまで真剣に話し合っていたので、ボランティア側も楽しく参加しているのだと思った。

東浦町には約 1500 人の外国籍の人が住んでおり、外国人比率は 2.99%と愛知県のなかで 54 市町村中 17 番目の比率である。17 番目ということに対しては、わたしの中学校にも 30 人ぐらいの外国人がいたので大きな驚きはなかった。ほかの市にも同じぐらいの外国人がいて思っていたので、ほかの市町村に外国人がいないことには少し驚いた。東浦町は、刈谷市や名古屋市、岡崎市などとは違い、土地代が比較的安く住みやすいこと、多くの働き口が近くに存在していることなどから、住む場所選ばれているようだ。

東浦町に住む外国人が就いている職業は、おもに製造業や中小企業である。大手企業で働くためには日本語能力などハードルが高いのかもしれない。これに関しては、外国人側だけでなく日本の企業側にも、外国人を雇うことに対する対応が必要だと思った。日本は多くの移民を受け入れていないので、外国人に対する対応をよりよくしてしまうと、多くの移民が流れ込んでしまう可能性があり、たいへんなのかもしれない。しかし、日本に住んでいる人が「窮屈だ」と思いながら生活することはよくないことだと思う。日本に住む日本人だけが住みやすいのではなく、日本に住む外国人にも住みやすいと思われるような環境づくりが進めばいいと思う。

(平林虎之介)

東浦町 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 49,224 人

外国人登録者数 1,474 人 (割合 2.99%)

1	ブラジル	841 人
2	中国	164 人
3	フィリピン	157 人
4	ベトナム	90 人
5	韓国・朝鮮	59 人
6	その他	163 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>

# 楽しく過ごすために

## 碧南市友好親善協会

わたしは、2017年11月19日（日曜）に、碧南市友好親善協会の開く日本語教室を訪問した。碧南市が毎週日曜日10時からおよそ1時間半開催しているものである。1回の教室に来る外国人は50人ほどであり、外国籍の方がたのニーズに応えた授業を展開している。

碧南市友好親善協会は、6年ほど前から日本語教室を開いている。5パーセント以上が外国人である市町村に、基礎的な日本語の指導をおこなうよう、県庁から指示が出されたためだ。当時の碧南市はその割合を超えていたため、日本語教室を開講することを決めた。

まずはじめに、碧南市は日本語を指導するボランティアスタッフを募集し、約30人が集まった。日本語教室の開講は碧南市にとって初の試みであったため、集まったボランティアスタッフたちは近隣の市（半田市、刈谷市、西尾市など）の日本語教室を見学し、開講にいたるまでや開講してからの手順や方法を学んだ。また、5回ほど外部講師を招いての講習会を開き、日本語の指導法などを身につけた。そして県庁から指示が出されておよそ1年後、日本語教室をスタートさせた。ボランティアスタッフ30人、外国人約5000人でのスタートだった。

はじめのうちは、ブラジル、中国から来た外国人が圧倒的に多かったが、現在は、ベトナムから来ている人が増えているようだ。ベトナム、ブラジル、中国のほかに、インドネシアやフィリピンから来る人も多い。また、ネパール地震後に仕事を求めて来日したとみられるネパール人や、日本企業が多く進出しているラオスなどから来ている人も多くなっているそうだ。そのほかにもパキスタンやアルゼンチン、ペルー、ウルグアイ、スリランカなどから来ている人もいる。このようなことから考えると、碧南市は世界のさまざまな国からの外国人を受け入れる市となっているということがわかる。

碧南市友好親善協会の日本語教室は、普段は日常会話や漢字、文化などを教えているが、日本での生活で困っていることの相談にもものっている。とくにごみの分別で困ることが多いようだ。碧南市はごみの分別が進んでいる。外国人にとって、ごみの分別はとても難しい。瓶を色によって分別することや、紙の種類によって分別するということは、外国人には理解しがたいのだ。また、碧南市で住んでいくための行政的な手続きや、軽微な事故などが起きた場合のアドバイスなどもおこなっている。さらに、技能実習生として日本に滞在している3年間のうちに日本人と結婚する人もいるため、恋のお悩み相談も受けているようだ。

また、日本語能力試験という検定の勉強の手伝いもしている。日本語能力試験とは、日本語を母語としない人を対象としたものであり、文法・漢字・語彙・聴解・読解の項目で構成される。挨拶や買い物、自己紹介などの簡単な文章から、上司との会話やスピーチ、実用書の読解までのレベルがあり、年に2回実施される試験である。簡単なN5から難しいN1までのレベル分けがあり、N3からN1を取得すると、海外の日本企業に有利に就職できるようだ。教室に通いはじめたばかりの外国籍の方がたは、日常会話や漢字などを学びたいと言っている。しかし日常会話

に困ることが少なくなってくると、帰国後に日本企業に有利に就職するための日本語能力試験は、より高いレベルのものを取得したくなる。そこで碧南市の日本語教室は、ある程度の試験勉強のお手伝いをしている。日本語を母国語としているわたしたちでさえ難しいと感じる文法などが、試験で出題されることもある。外国人がひとりで勉強し取得するのは、少し難しいと思う。このようなことから考えると、外国人にとって日本語教室は、とても重要なものであるといえるだろう。

碧南市の日本語教室では、ボランティアスタッフとして、中国人やベトナム人に日本語を教えている中国人男性がいた。はじめは日本語を教わりに来ていたが、一生懸命に日本語を勉強し、N1取得後はボランティアをしているようだ。数人の外国人に対してボランティアスタッフ1人というのが基本の日本語教室で、彼は中国人3人、ベトナム人2人の、計5人の生徒を指導していた。ひとりひとりの要望を聞き、レベルに合わせた指導をおこなうように心がけていたという印象だ。仕事の話などで会話を広げていき、住んでいるところの話や、生徒の出身国の話などで盛り上がり、楽しく日本語をつかっていた。どんな話でもとにかく積極的に日本語をつかい、互いにわからないときは中国語で補足したり、スマートフォンで調べて伝えたりしてコミュニケーションをとっていた。また、彼は日本語をとても流暢に話すことができたため、職場での会話も困らないのではないかという質問をしたところ、彼は、職場では日本語はほとんどつかわずジェスチャーでやりとりをするということを教えてくれた。日本語をつかわない状況にいてもN1を取得するという彼の、日本語に対する努力がみえた気がした。

碧南市友好親善協会の日本語教室は、とても和やかな雰囲気であった。ボランティアスタッフの方がたも生徒たちもとても仲がよく、過ごしやすい環境であると感じた。生徒のなかにはわたしの家の近所に住んでいる方もいて、身近なところにも外国から来ている技能実習生がいるということを知った。また、碧南市は適度に田舎であるからよい、と言う方もいた。出身地域があまり発展していない人から見ると、それほど慌ただしくしていない碧南市に好感がもてるようだ。そんな碧南市での生活を、日本語教室に通うことでよりよいものとしていただけたら嬉しく思う。

(石川愛美梨)

碧南市 外国人登録者数 平成 28 (2016) 年末現在

市内総人口 71,746 人

外国人登録者数 4,045 人 (割合 5.64%)

1 ブラジル	2,147 人
2 フィリピン	415 人
3 中国	337 人
4 ベトナム	333 人
5 韓国・朝鮮	80 人
6 その他	733 人

出典：「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (平成 28 年 12 月末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-h28-12.html>





# 結びにかえて

本報告書「多文化共生に向けて～愛知県各自治体の取り組み～ 2017年度版」は、名古屋学院大学国際文化学部国際協力学科1年生が発展セミナー（佐伯担当）においてまとめたものである。2015年度につづき2冊目の報告書となる。

発展セミナーは、2年次以降のより専門的な学習に向け、国際協力を考えるための基礎的な学習を、学生たちが協働しておこなう場である。まず身近な国際協力について理解してもらいたいという思いから、学生たちの暮らす地域の自治体の日本語教室などを訪問することを課題とした。

愛知県では、日系ブラジル人をはじめとして、中国や東南アジアからの技能実習生など、多くの外国籍の人びとが暮らし、県の製造業を支えている。しかし、日本人ではないかれらのなかには、困難に直面している者も少なくない。国民健康保険・国民年金を滞納すれば、自身の在留資格や家族の呼び寄せに影響するが、社会保険に加入できるかは派遣会社しだいである。日本人や永住・定住者の配偶者として在留資格を得ている場合、離婚すれば自身の在留資格を更新できなくなる可能性があるため、仮にドメスティック・バイオレンスの被害を受けていても我慢せざるを得ない人もいる。手当もないまま長時間の残業を強いられても、技能実習生には職場を移る自由はほぼない。これらの問題を解決したくても、日本の法令や手続きに関する知識に加え、日本語という大きな障壁が立ちほだかる。

今回の調査を通じて、学生たちは、外国籍の人びとがどのような困難や苦勞を抱えており、どのような支援を必要としているのか、自治体がどのような支援をおこなっているのかを知った。さらに多くの外国籍の人びとと出会うことで、「多文化共生」への道を歩んでくれると期待している。

最後になったが、不慣れな学生たちを暖かく迎えてくださった方がたに、この場をお借りして心よりお礼申し上げたい。

2018年3月、佐伯奈津子

「多文化共生に向けて～愛知県各自治体の取り組み～ 2017年度版」

2018年3月

監修・発行 名古屋学院大学国際文化学部 佐伯奈津子

〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25

saeki@ngu.ac.jp

<http://blog.ngu.ac.jp/saeki/>

